演劇祭
「板橋ビューネ」
会期：2013 年 8 月 27-9 月 4 日
会場：サブテレニアン（東京・板橋）
プレスリリース

2013.07.10 ver.

作成者：横田宇雄

＜目次＞

■はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
■「板橋ビューネ」開催概要・・・・・・・・・・・・・・・3-4
■サブテレニアンについて・・・・・・・・・・・・・・・・5-6
■参加団体紹介：ＮＵＤＯ・・・・・・・・・・・・・・・・7-8
■　　：ヘアピン倶楽部・・・・・・・・・・・・・9
■　　：M.M.S.T（福岡）・・・・・・・・・・・・10-11
■　　：劇団ドクトペッパズ・・・・・・・・・・・12-13
■　　：長堀博物館◎プロデュース５・・・・・・14-15
■　　：劇団総合藝術会議・・・・・・・・・・・・16
■　　：三木美智代 in 風蝕異人街（札幌）・・・・17-18
■　　：雲の劇団雨蛙（島根）・・・・・・・・・・19
■取材について、ご観劇案内・・・・・・・・・・・・・・20

■あいさつ

このフェスティバルの参加条件は「古典の上演」です。　既存のテキストを用いて、新しい解釈・演技・演出によって古典の魅力を引き出すことが目的です。　芸術に必要な「独創性」や「オリジナリティ」、「個性」といったものは、果たして舞台芸術にとって何を意味するのでしょうか。果たして、テキストの「独創性」だけが舞台芸術の“新しさ”なのでしょうか。私たちは少し遡って、俳優と観客が演劇を形作るという課題に立ち返ってみたいと思います。　誰もが知っている古典戯曲を取り扱うことで、舞台芸術にとって最も重要な要素――俳優と観客――が創造するフェスティバルを目指したいと思います。

上演は常に現在地点でしか行われません。「古典」は、「古典」として読まれるだけでは同時代性を持ってはいません。それが上演され、息を吹きかけられ、新しい解釈を得ることで同時代性を手にすることができます。私たちは決して、歴史を抜きにして「イマココ」を理解することはできませんから、「古典」に触れることで初めて現代性を獲得することができるのだと思います。テキストは単なる読み物ではなく、俳優と観客の間で育まれるべきものです。その意味で、舞台芸術は常に未完成的であり、生成的であり、未熟な芸術なのでしょう。それは、大規模な劇場であっても、私たちのような小規模の劇場であっても同じことです。まだ完成も熟練もしていないカンパニーのエネルギー。不器用でも「古典」に息を吹き込むことに重きを置いています。

サブテレニアンは決して恵まれた劇場ではありません。不便な部分もあると思います。しかしそれを不便と考えず、魅力と感じる方を求めます。そしてそういう場所でやるからには漫然とした作品はいりません。先鋭的な作品を求めます。

私たちは、新しい演劇を作る担い手と、その観客を求めています。

私たちは、皆様に対して開いていきたいと思います。是非、板橋ビューネにご応募いただければ幸いです。

板橋ビューネ、実行委員会

■「板橋ビューネ」開催概要

【会期】2013 年 8 月 27 日-9 月 4 日
【予算】122 万円（全体合わせて）／内 45 万円（演劇祭運営費として）
【関係者数】50 名
【来場者数（見込み）】600 人（招待客含む）
【売り上げ（見込み）】1,400,000 円
【会場】サブテレニアン
〒173-0013 東京都板橋区氷川町 46-4 B1F
【連絡先】
080-4205-1050 (赤井)
itabashi.buhne@gmail.com
【チケット料金】前売当日共に 2,500 円／全公演共通チケット 6,000 円
【ウェブサイト】http://itabashi-buhne.jimdo.com
【タイムスケジュール】

日時	上演時間・劇団			
8/27(火)			20 :00	NUDO／ヘアピン倶楽部
8/28(水)			20 :00	長堀博物館／総合藝術会議
8/29(木)			20 :00	M.M.S.T／ドクトペッパズ
8/30(金)	14 :00	M.M.S.T／ドクトペッパズ	19 :00	M.M.S.T／ドクトペッパズ
8/31(土)	14 :00	NUDO／ヘアピン倶楽部	19 :00	NUDO／ヘアピン倶楽部
9/ 1(日)	14 :00	長堀博物館／総合藝術会議	19 :00	長堀博物館／総合藝術会議
9/ 2(月)			20 :00	雲の劇団雨蛙／風蝕異人街
9/ 3(火)	14 :00	雲の劇団雨蛙／風蝕異人街	19 :00	雲の劇団雨蛙／風蝕異人街
9/ 4(水)			19 :00	シンポジウム

※一ステージに付き、二作品（二劇団）同時上演となります。
※上演作品の間に転換のための幕間がございます。

【共通チケットについて】
共通チケット（6,000 円）一枚で、全ての作品をご覧いただけます。
※二度目以降のご観劇の際には必ずチケットの半券をお持ちくださるようお願いいたします。

【参加劇団と上演演目】
NUDO：『紙風船』（岸田國士）
ヘアピン倶楽部：『Sunday people』（原作：岸田國士）
M.M.S.T：『カラマーゾフの兄弟』（原作：ドストエフスキー）
劇団ドクトペッパズ：『ヒュブリス』（原作：シェリー『フランケンシュタン』）
長堀博物館◎プロデュース５：『ヘッダ・ガブラー』（イプセン）
劇団総合藝術会議：『J.A.Strindberg の害について』（チェーホフ＆ストリンドベリ）
雲の劇団雨蛙：『財産没収』（テネシー・ウィリアムズ）
三木美智代 in 風蝕異人街：『三木美智代飛び出せ文学全集シリーズ「桜の園」』（原作：チェーホフ）

■「板橋ビューネ」その他の活動

【シンポジウム内容】

「板橋ビューネ」に参加する劇団・関係者が参加するシンポジウムです。上演作品の原作に対する思いやり、演出意図、今後の演劇界がどうあるべきかなど、盛りだくさんのシンポジウムです。

終了後、簡単な打ち上げもありますので、どうぞお気軽にご参加ください。

【特別企画「アフター・パーティー」について】

毎公演終了後に、簡単なパーティーを開催いたします。

出演者と、演出家と、上演終了後にお話いただけます。

簡単なお酒やお食事もご用意いたしますので、お気軽にご参加いただければ幸いです。

※参加費は無料ですが、運営上のカンパなどいただければ幸いです。

【「別冊サブテレニアン・板橋ビューネ特別号」の発行】

演劇祭全体を通じて、批評家を招き劇評を書いてもらいます。

書かれた劇評はサブテレニアンの発行する「別冊サブテレニアン」に掲載し、「板橋ビューネ特集」として発行します。

詳しい情報はウェブサイトをご覧ください。

http://itabashi-buhne.jimdo.com

■サブテレニアンについて

SUBTERRANEAN は客席数 40～50 名の演劇、ダンス、トークイベントなどでお使いいただける小屋です。

自主企画の公演やロングラン公演、建て込み稽古からそのまま本番での使用、公開稽古等、ほかの劇場では難しいことも SUBTERRANEAN では可能です。

決して広くはない小屋ですが、皆様の溢れるアイディアを形にして下さい。

"Subterranean" は"地下の"という意味です。

ジャック・ケルアックの小説"The Subterraneans"からとりました。

日常からはこぼれ落ちて、埋もれてしまうようなアイディアや企画を発表できる場でありたいと願っています。

主な事業

●劇場運営

都内でも有数の価格帯で、これまで若手のカンパニーに多くご利用いただいています。

――仕込・本番：25,000 円／１日(9-23 時）、設備使用料：5,000 円／日(9-23 時）

（一部追加料金あり）

――公演パックプラン：

１週間パック(7days) ---- 200,000 円 (設備使用料込)

２週間パック(14days) ---- 320,000 円 (設備使用料込)

●稽古場として

サブテレニアンは稽古場としても利用することができます。

――長期割引

１０日以上～５パーセント割引　13,000×10＝130,000 のところ 123,500 円

(※長期割引あり)

――公開稽古プラン・稽古場レポートプラン：8,000 円／１日(9-23 時／光熱費込)、7,000 円／半日(9-17 時、17-23 時／光熱費込)(長期割引なし)

――稽古場サポート：5,000 円／半日(9-17 時、17-23 時／光熱費込)

サブテレニアンで公演を行う団体に限り、稽古場料金を割引きます。ご利用日の一ヶ月前より予約の受付を開始します。

●タタキ場として

サブテレニアンはタタキ場としても利用することもできます。

――13,000 円／１日(9-23 時／光熱費込)、8,000 円／半日(9-17 時、17-23 時／光熱費込)

●演劇祭「板橋ビューネ」主催

年に一回、演劇祭を開催します。

●提携公演の実施

劇場が支援する形で劇団と提携して、新作の上演を行っております。

●別冊サブテレニアンの発行

不定期で「別冊サブテレニアン」というフリーペーパーを発行しております。

※これまでのインタビュー掲載例

橋本清（ブルーノプロデュース）、劇団満塁鳥王一座、白鳥英一（OtoO Presents）、石神夏希（ペピン結構設計）、生田恵（三角フラスコ）、荻野欣士郎監督など

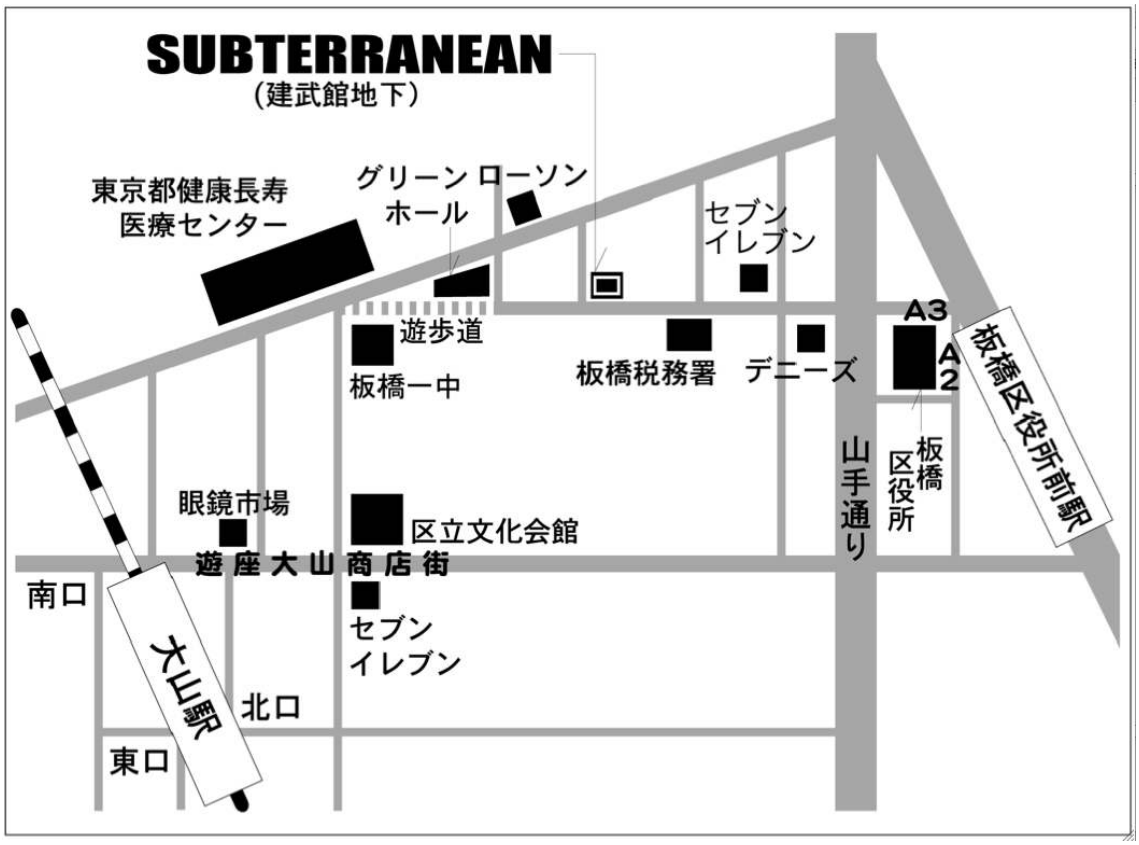
劇場へのお問い合わせ･アクセス

サブテレニアン
代表者：赤井康弘

住所：〒173-0013 東京都板橋区氷川町 46-4 B1F
TEL：080-4205-1050 （赤井）
E-MAIL：info@subterranean.jp

■大山駅よりお越しになる場合：
1.（南口から）南口を出たら右に進み、踏切を渡り、そのまま直進。
（東口から）東口を出たら駅の地下歩道をくぐり、北口前のファミリーマートの角を左に進み、突き当たりの眼鏡市場を右に曲がる。
2.遊座大山商店街を進み、板橋区文化会館とセブンイレブンのある交差点を左に曲がる。
3.大きな道路にぶつかる信号の手前で右に曲がり、遊歩道に入る。
4.遊歩道を過ぎ、左手に建武館というキックボクシングジムが現れたら、その建物の地下です。

■板橋区役所前駅からお越しになる場合
1.Ａ３出口を出て左に曲がる。
2.山手通り（上に首都高があります）を渡り、デニーズの右どなりの道を直進。
3.右手に建武館が現れたら建物をクルッとまわると、そこが入り口です。



劇団紹介①

NUDO

【劇団について】

2004年に高校在学中にインターネットを介してメンバーを募集。映画製作チームとして活動する。高校生主体の自主映画製作ユニットとして、地方メディアやネット上の掲示板で取り上げられ、話題になる。

2009年、メンバー脱退を機に、よこたたかおによる単独ユニットになる。
これまでの本公演数は10本を超え、小作品を含めると20作品以上発表している。

自然主義演劇とコンタクト・インプロビゼーションを取り入れた作風が特徴。
俳優を作品の中心に置き、過度な装飾や演出は施さず、「演じること」の社会的意義を問い返す。

旗揚げ当初から、古典作品をベースに、戯曲を書き換え、現代化して作品を発表している。

現在は、演劇におけるミニマリズムを追求する形で研究・創作活動を行っている。

また、演劇研究・文学研究を同時並行的に行っており、ワークインプログレス形式で長く時間をかけながら作品を制作し、発表するスタイルを取っている。

動員数は一公演毎に100人程度。

現在は、年に一本程度のペースで作品を発表している。

2013年夏より2015年まで、約二年間活動を休止する。

●主な作品

2007年6月「タイタスアンドロニカス/アフタートーク」＠旧日出小学校　体育館
2007年12月「simcity/12,000,000」＠アトリエ春風舎 2008年8月「ペトルーシュカ」＠ＺＡＩM401号室
2009年3月「春の祭典」＠アトリエ・フォンテーヌ
2010年4月「ブルーバード・オブ・スーパーフラット」＠にぎわい座　のげシャーレほか

●主な受賞歴、メディアなど

2006年5月、諸活動が東京新聞TOKYO発に掲載。
2006年5月、ＮＨＫ一期一会に出演。
2007年、尼崎戯曲賞第一次審査通過

ウェブサイト：http://yokotatakao.blogspot.jp/

【作品について】

この作品は『紙風船』の上演ではなく、『紙風船』についての上演である。

前作『日曜日』(2012)で用いた日常に溢れる単語の羅列により物語を浮かび上がらせるという手法を、既存のテクストを用いて実行する。

「俳優はイメージを操作する主体である」という問題意識を出発点に、俳優の技能としてのイメージの操作能力、時間的認識という二つの観点からテクストを再構成する。

この作品が首尾よく描いているように、人間は過去の甘美な記憶を追憶し、反復することでしか辛い現実を生き抜くことができない。その意味で、人間は日常的に現前を反復し、反芻しながら生きている。それは人間が郷愁の中で生きられないということを意味することであるが、それは同時に何故我々は目の前にある現実を捨て去り、媒体を通じてしか接触することができないのか、という悲しみをも意味する。

『紙風船』は1925年に発表されたが、初演は1938年である。その意味で、この戯曲はレーゼ・ドラマであり、読まれるための劇である。従って、これは実は上演に適している

テクストではなく、読まれ、追憶されるためのテクストなのだ。『紙風船』に描かれている夫婦は、愛に包まれた関係から、記憶の中の甘美なあの時の恋愛として上演される。

【上演データ】
●劇団名：NUDO
●作品：『紙風船』（岸田國士）
●上演日程：8 月 27 日（火）20 :00／8 月 31 日（土）14 :00／19 :00
●上演時間：45 分
●構成・演出　よこたたかお／音楽　中堀徹
●出演　菊川仁史／佐藤和紅（テラ・アーツ・ファクトリー）／双山あずさ
●参加者数：5 人
●メールアドレス：nudo.engeki@gmail.com（よこたたかお）

劇団紹介②

ヘアピン倶楽部

【劇団について】

2012 年 9 月演劇ユニットとして、板橋サブテレ二アンで「曲線」により活動開始。

その後、2013 年 3 月にサブテレ二アン提携公演として「リンゴとコーヒー」を上演。人間は色々と様々の事象と折り合いを付けながら生きているという事を現段階での、作劇の出立地点としている。人と人の間に生まれてきてしまう事を紡ぎだそうという試みと演劇とは何であろうか？という疑問を足掛かりとして、人が人前で行う演劇というモノにやってくる様々な問題を考えていこうという集団。地道に活動をしている。

ウェブサイト：http://ameblo.jp/kurabupin/

【作品について】

日曜日の昼。女の家。部屋には紙風船が一つ転がっている。結婚したその女の家にやってくる男。その女の家に突然やってくる、近所の男。漠然とすぎる時間。だらだらとどうしようもなく時間は流れる。残酷に。

【上演データ】

●劇団名：ヘアピン倶楽部
●作品：『Sunday people』（原作：岸田國士）
●上演日程：8 月 27 日（火）20 :00／8 月 31 日（土）14 :00／19 :00
●上演時間：60 分
●作・演出　有川義孝／制作　竹岡直紀／甲斐荘崇
●出演　飯田祐司／今井慶／平山葉子
●参加人数：7 名
●メールアドレス：clubpinn@yahoo.co.jp

劇団紹介③

M.M.S.T

【劇団について】

「現代における演劇の確立」をコンセプトに 1998 年東京にて活動を開始。舞台に 立つ身体の特権性を常に問い返しながら、独自の身体感覚で現代から古典まで 様々なテキストに取り組んでいる。舞台作品のみならず、サウンド・パフォーマ ンスや映像インスタレーションにおいても意欲的に作品を発表、ジャンルにこだ わらない横断的な活動を続けている。

【代表作】

2004 年 10 月：『マクベス』作／W シェイクスピア＠in-dependent　theater 2nd（大阪）＜柿落し公演＞
2005 年 11 月：『polyphonic』原作／森本薫＠in-dependent　theater 1st（大阪）
2008 年 3 月：『紙風船』　作／岸田国士＠ぽんプラザ（福岡）
※福岡市文化芸術振興財団主催コンペにて最優秀作品賞を受賞
2010 年 4 月：『女中たち』作／ジャン・ジュネ＠横浜美術館レクチャーホール（神奈川）
2010 年 10 月：『あるイングランド劇作家の眼差し』原作／W シェイクスピア＠京都文化芸術会館（京都）＜ぶんげいマスターピース参加＞
2012 年 6 月：『罪と罰』作／ドストエフスキー＠横浜、奈良、大阪、福岡　４都市ツアー
2013 年 1 月：『憑依』作／川津羊太郎＠ 大野城まどかぴあ＜九州戯曲賞大賞作品リーディング公演＞

【作品について】

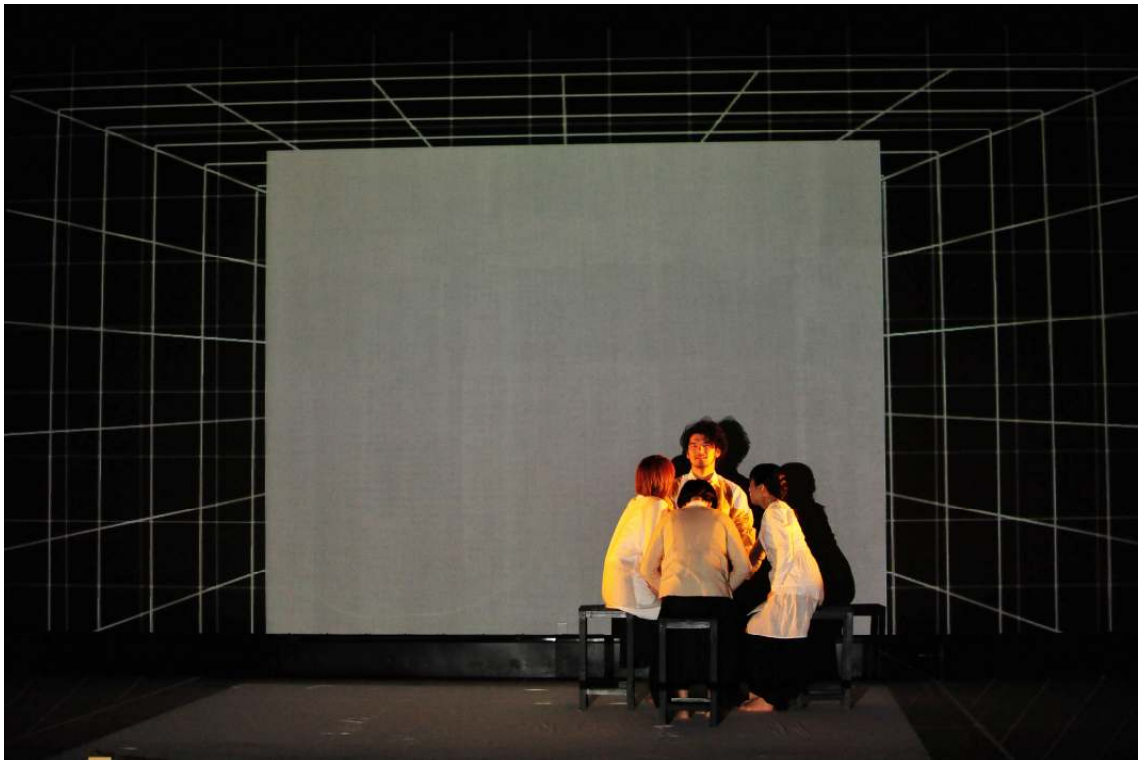
「カラマーゾフの兄弟」はロシアの文豪ドストエフスキーの代表作とも言える長編小説です。描かれている人間関係の複雑さは、ひとつの視点からでは到底解き ほぐせない程深く絡まりあっていますが、今回『家族』というテーマから切り込 み、宗教問題ではない「倫理」について考えてみたいと思います。

本作品は M.M.S.T が行う３年越しのドストエフスキープロジェクトの第３段階にあたり、2011 年 11 月には第１段階として『地下室の手記』(『罪と罰』を執筆する契機 となったとされている短編小説)、2012 年 6 月には第２段階として「罪と罰」に取 り組みました。

これらの作品の創作で明らかになったことは、ドストエフスキー の世界には、強烈な「信仰心」が漂っている為か、ある「構え」をもって臨まな いとキリスト教の研究で終わってしまう可能性が高いということです。宗教が定 まらない稀有な民族として世界的に知られる我々日本人が、キリスト教に正面か ら取り組む為には数多くの準備が必要な上に、究極的には理解出来ない可能性が 高いと言わざるを得ません。しかし、本作の創作を通して現代の日本人としての 「キリスト教」及び「信仰」について考える契機を生み出せればと考えます。

【上演データ】

●劇団名：M.M.S.T
●作品：『カラマーゾフの兄弟』（原作：ドストエフスキー）
●上演日程：8 月 29 日（木）20 :00／8 月 30 日（金）14 :00／19 :00
●上演時間：60 分
●演出・照明・音響・舞台美術　百瀬友秀
●出演　豊田可奈子 他
●参加人数：10 名を予定
●メールアドレス：contact@mmst.net



劇団紹介④

劇団ドクトペッパズ

【劇団について】

東京高円寺の公共劇場【座・高円寺】内にある劇場創造アカデミーの修了第一期生 4 人（大山晴子、古賀彰吾、島田健司、下村界）にて 2012 年に旗揚げ。「過去から学ぶ」をコンセプトに、主に古典戯曲や既成の小説、物語などを元にした演劇創作の集団として活動している。

大山が竹屋啓子主催のダンスカンパニー、ダンス 01 の研修生であり、島田が日本マイム研究所の研修生、古賀がパフォーマー「せせらぎ」として高円寺や三軒茶屋の大道芸フェスに参加、下村が役者としてカンパニーロディージオなどの他劇団に客演するなど、各々個人としての活動も積極的に行っており、公演のたびにお互いが得たものを持ち寄って、新しい演劇創造の可能性を模索する、集団創作のスタイルをとっている。

2012 年 7 月劇団ドクトペッパズ旗揚げ公演『お茶の間ギリシア悲劇アンティゴネー』では、ソフォクレスの『アンティゴネー』を元にテキストを出演者 5 人の芝居に構成し、舞台中央に 6 畳の畳敷きの空間を置き、その空間とその周りで起こることとすることで『アンティゴネー』を内部（家族内ルール）と外部（大量の死体という現実）の問題と捉えなおして上演した。

2013 年 2 月、中野テルプシコールにて第二回公演『ヒュブリス』を上演した。『ヒュブリス』は 1818 年のメアリー・シェリーの小説『フランケンシュタイン』を下地に、フランケンシュタインの怪物創造の部分を抜き出した、ノンバーバルシアターに近い形のパフォーマンスである。

本演劇祭ではこの第二回公演『ヒュブリス』を再演する。

劇団の今後としては沖縄県沖縄市で毎年開催される児童演劇祭【キジムナーフェス 2013】に 7 月にフリンジとして参加することが決まっている。　11 月には中野の劇場 RAFT で行われる演劇祭【芥川龍之介　＋－×÷】にも新作で参加することが決定し、今回の出演者である島田がその演出を担当する。

【作品について】

この『ヒュブリス』という作品は小説『フランケンシュタイン』を元にしています。作品創作にとりかかるまで、フランケンシュタインと聞いてもこめかみにボルトがねじ込まれたデカい人、くらいのイメージしかありませんでした。多くの人が勘違いしているのですが、そもそもフランケンシュタインは怪物の名前でなく、怪物を作り出した科学者の名前です。

科学者フランケンシュタインは生命の秘密を探るべく死体を使って実験をし、死体によって作り出された人造人間に生命を吹き込むことに成功します。しかし、フランケンシュタインは自分の行ったことに対して恐れを抱き始め、怪物を残してその場から逃げてしまいます。残された怪物は右も左も分からずに外に出ていきますが、その醜い姿から手ひどく迫害されます。一人で逃げ回りながら暮らしていた怪物は人間の残した火や本を頼りにだんだんと世界を理解していきます。文字を読めるようになると、フランケンシュタインの日記を見つけ自分の出生の秘密を知り、フランケンシュタインへの復讐を計画し、自分の創造主を破滅へと追い込みます。

と、おおよそこのような内容の小説であり、僕が当初イメージしていたのと大分違いました。特に怪物の姿の描写は本来の小説には少なく、矛盾すらあり、「描写不能、再現不能」の恐ろしい何かでした。しかし、映画が怪物のイメージを決定付けてしまい、さらにそのイメージが一人歩きを重ねた結果、ボルトがこめかみに刺さったり（映画では首に刺さっている）、フランケンシュタインが怪物の名前になったり、怪物くんのお供にまでなりました。

イメージの一人歩きにより、フランケンシュタインはマッドサイエンティストとなり、怪物は白痴のイメージを負わされましたが、実はフランケンシュタインは全くの良心から実験を行っていたし、怪物はこの小説の中で一番賢い存在として描かれています。フランケンシュタインは人類の発展のために努力したのに、なぜ悲劇を生んだのか？怪物は賢く強靭な肉体を持って生まれたのになぜ非道な殺人鬼になってしまったのか？この小説は「現代の神話」と言われているだけに、非常に難しい問題を提起しています。

『ヒュブリス』はこの小説の、怪物創造の部分に焦点を当てた作品です。フランケンシュタインは「怪物の実験のために優れたパーツであるかどうか」という見方で死体を見つめていたと思います。しかし、死体はそういう価値観で判断するものではなく、各々の人生が刻まれたものです。もし、その刻まれたものを尊重しないのならば、今生きている人生に何の価値もありません。人類の発展のためとは言え、フランケンシュタインはここを見誤ったのだと考えています。人類、科学のためには死体を道具として扱っても良いのだという考えにフランケンシュタインの傲慢（ヒュブリス）があり、そのためにフランケンシュタインは破滅します。そして、その問題は死体にも当てはまるだろうと思います。死体にも生きてきた人生の中で知らず知らずに傲慢な行動をとってしまった過去があり、その傲慢性が怪物の中に集積し、脈打っていると考えました。

『ヒュブリス』は非常に分かりにくい作品ですが、3 体の死体が一体どのようなヒュブリスを抱えているのだろうかと、色々と想像しながらご覧になっていただきたい作品です。

【上演概要】

●団体名：劇団ドクトペッパズ
●作品：『ヒュブリス』（原作：シェリー『フランケンシュタイン』）
●上演日程：8 月 29 日（木）20 :00／8 月 30 日（金）14 :00／19 :00
●上演時間：45 分程度
●スタッフ：構成・演出　古賀彰吾／音響　富山雅之／衣装　佐久間祥子
●パフォーマー：大山晴子／古賀彰吾／島田健司／下村界
●参加者数：６人
●メールアドレス：dctpeppers@gmail.com

劇団紹介⑤

長堀博物館◎プロデュース５

【劇団について】

「長堀博物館◎プロデュース」は、2011 年に 20 周年を迎えた「楽園王」の主宰、長堀博士が、個に根ざしたより実験的な表現の模索を行う為に活動。自らのカンパニーが 20 周年の年に震災を経験し、集団の分岐点と社会の分岐点の重なりに芸術家としての勝手な意味を見出し、芸術文化の混迷と共に個人としても混乱を内包しながら、未だ答えのない問題に向き合おうと創作に着手し続けている。

「長堀博物館」名義では、今までに岸田國士「紙風船」、オリジナル戯曲「風」、イヨネスコ「授業」、アラバール「戦場のピクニック」を発表した。

その演出作の特徴は、能や歌舞伎に敵うような様式美を現代劇から新しく創作する野望を胸に秘め、言葉の意味よりも音にフォーカスした実際耳に心地よい話法や、具体的に目に見える様式美を「型」に高めるよう模索、追及してきている。過去には、第 5 回利賀演出家コンクールではイヨネスコ「授業」にて「優秀演出家賞」を受賞。「Shizuoka 春の芸術祭」には 2 回招聘され、寺山修司「青ひげ」エウリピデス「メディア」を上演している。長堀には劇作家として、及び演出家として、合計すると 100 本近い上演作がある。（財）舞台芸術財団演劇人会議、会員。

●今までの特に目立った公演

2000 年 3 月＠東京芸術劇場・小ホール１　「メタファンタジア［眠りの森の･･･］」

同年 8 月＠富山県利賀芸術公園　第 1 回利賀演出家コンクール参加
「マッチ売りの少女」（作、別役実）

2001 年 5 月＠東京芸術劇場・小ホール１　楽園王 10 周年２作品連続公演
「ムユウ」「図書幻想」

2002 年 6 月＠静岡県舞台芸術公園・「楕円堂」　Shizuoka 春の芸術祭参加
「青ひげ」（作、寺山修司）

2004 年 8 月＠富山県利賀芸術公園　第 5 回利賀演出家コンクール参加
「授業」（作、イヨネスコ）※優秀演出家賞受賞

同年 11 月＠早稲田戸山公園・特設円形劇場　ＢｅＳｅＴｏ演劇祭参加
「授業」（作、イヨネスコ）

2005 年 6 月＠静岡県舞台芸術公園・野外劇場「有度」　Shizuoka 春の芸術祭参加
「王女メディア」（作、エウリピデス）

同年 10 月＠山口県伊陸市みどり会館　Ikachi 国際舞台芸術祭参加
「授業」（作、イヨネスコ）

同年 11 月＠吉祥寺シアター　「台詞劇　白鳥の湖」（オリジナル）
「現代劇　修禅寺物語」（作、岡本綺堂）　二本立て公演

2007 年 4 月＠東京芸術劇場・小ホール１　「お国と五平」（作、谷崎潤一郎）

2009 年 8 月＠富山県利賀芸術公園　利賀演劇人コンクール 10 周年特別開催
「谷底」（作、鈴木泉三郎）

※無記名の劇作と、演出はすべて、長堀博士。

【作品について】
　長堀にとってのイプセンは、2003 年の「利賀演出家コンクール」の「人形の家」に次いで 2 回目である。大変厳しい見方をすれば、今回の「ヘッダ・ガブラー」は、「人形の家」で評価され、女性の権利を獲得する運動の旗手となったイプセンが、その後に「同様な評価」を期待されて（自ら期待し）上程した作品であるのは想像に難くない。また、本作を書く手がかりとしてチェーホフの「かもめ」に影響を受けただろうことも一読すれば伺える。もし一般に言われるように「芸術家が、自分の物まねをするようになったらお終い」なら、この作品には見るべきところが「ない」と言わざるを得ない。しかし、それを飲み込んででも上演に値する価値を見出すとするなら、「ヘッダ」を初め登場する人物の生き生きとした描写であり、生々しい自己主張のすれ違いや摩擦、最終的に辿り着く人間の崩壊だろう。ここでは簡単には要約できない、一貫性のない、故に非常に現実的で生々しい人間が描かれていると言える。物語そのものは説得力を持たない部分も含む「虚構」だが、登場人物は「生の人間」のようである。今回の上演では、そんな人物の描き方を手掛かりに、この作品の現在進行形での最良の演出作を上演するつもりである。「近代の女から現実を覗く試み」。

【上演情報】
●団体名：長堀博物館◎プロデュース５
●作品：『ヘッダー・ガブラー』（イプセン）
●上演日程：8 月 28 日（水）20 :00／9 月 1 日（日）14 :00／19 :00
●上演時間：50 分を予定
●構成／演出：長堀博士(楽園王)
●参加者数：6 名
●メールアドレス：r@kuenoh20.net

劇団紹介⑥

劇団総合藝術会議

【劇団について】

劇団総合藝術会議 2009 年 10 月「全てを包括しうる演劇」という標榜のもと、嵩山貴士を中心に結成された。毎回、演劇史の過去及び未来を見つめた検証、もしくは発明のもと、「戯曲に基づく俳優至上主義」や「最小単位の観客数」など公演毎のカンパニーに則ってクリエイションが行なわれる。

【作品について】

戯曲のフォーマットはチェーホフの「タバコの害について」をなぞり、劇作家ストリンドベリの作家とその時代について扱う。演劇史的に捉えられた戯曲は時の洗礼を受ける。そのプロセスは浮き彫りになり、現代へ通じていく。またストリンドベリ自身の「全か無か」という問いかけは、現代において遠くはない言葉になるだろう。

それは登場人物の私憤に傾いて行くモノローグでも触れられることになる。

【上演データ】

●団体名：劇団総合藝術会議
●作品：『J.A.Strindberg の害について』（チェーホフ＆ストリンドベリ）
●上演日時：8 月 28 日（水）20 :00／9 月 1 日（日）14 :00／19 :00
●上演時間：約 60 分
●演出　嵩山貴士／構成・台本　小野晃太郎
●キャスト：藤達成／矢部祥太／ゾ・トンジュン　他
●参加者数：9 人
●メールアドレス：hamlet.monster@gmail

劇団紹介⑦

三木美智代 in 風蝕異人街

【劇団について】実験演劇集団「風蝕異人街」
　札幌アトリエ「阿呆船」を拠点に東京でも活動している。寺山修司作品を上演するために旗揚げし、未だにアングラという言葉で形容される魂の叫びを発しつつ、独特の怪しさと色彩感覚を放つ演出が定評。劇団のコンセプトとしては「NOWHERE,NOBODY（どこでもない。何者でもない）」つまり、場所や人にこだわらない、「無国境・無国籍」という理念を「北方性」という体感度の中で芝居づくりをしている。利賀演出家コンクールでの受賞を機に翻訳劇、古典劇にも取組む。また「肉体と言葉」の融合を追及しているため、身体詩劇を上演している。

・2004 年 舞台芸術財団演劇人会議主催「利賀演出家コンクール」にて優秀演出家賞を受賞。Beseto 演劇祭参加（早稲田大学構内）
・2008 年ギィ・フォワシィ演劇コンクールにて審査員特別賞を受賞。
・2012 年韓国ソウル小劇場祭「D・Ｆｅｓｔａ」招聘

http://www.geocities.jp/ijingai

【三木美智代プロフィール】
　早稲田大学卒業。東京で活動後、実験演劇集団「風蝕異人街」設立に参加。2005 年より演出家・鈴木忠志氏による俳優育成プロジェクトに参加しスズキメソッドを受講。同時にコンテンポラリーダンス作品を東京・横浜にてソロで発表。振付演出作品も多数。

・2006 年　劇的な情念をめぐって　「イワーノフ」（演出：鈴木忠志／東京新国立劇場）
・2008 年　鳥の劇場「剣を鍛える話」
（演出：中島　諒人／鳥取県鳥の劇場・高知県立美術館・静岡県舞台芸術公園野外劇場・中国張家口市）
・2009 年 静岡県舞台芸術センター（spac）制作　「ふたりの女」（演出：宮城 聰／静岡県舞台芸術公園野外劇場）
・2011 年　FESTIVAL TOKYO 2011　「わたくしという現象」（構成・演出：ロメオ・カステルッチ／東京夢の島）

【作品について】
　「古典」を通じて「現在」を描きたいと思います。「今ここ」を描きたい。過去から未来に進む時間軸の中で「現在」を語るためには世界の広がりと歴史の深みの両方を意識しなければできないのです。以前からの構想として、チェーホフの『桜の園』を「一人芝居」として表現したいと思っていました。現在ほど、過去と未来の「はざま」でもがいている時代はないでしょう。現在こそ、この作品の底流にある「出来そこないの人間の芝居」は、まさに私たち演劇人にむけられた言葉であると痛切に感じていました。チェーホフの『桜の園』をまず、「テキストレジ」として「一人芝居」にしました。主人公ラネーフスカヤ夫人のひとり語りによって、この物語の「過去・現在・未来」を表現していきたい。今回の「テキストレジ」したこの作品の底流にあるテーマは「空席」であります。この作品の同時代的な滅びゆくものへの哀愁をラネーフスカヤの心の「空席」として描きました。「人間、ラネーフスカヤ」像をより明確にすることにより、新しいチェーホフの『桜の園』の本質が見えてくるのです。つまり、その誰もいない椅子こそ、登場人物たちそれぞれの「空席」であり、ラネーフスカヤの心の「空席」なのです。息がつまるほど孤独な心の内を隠し通したラネーフスカヤが何もない元の日常の世界へ戻るためには、意外にも孤独の魂を捨て去ることだったのです。そして「桜の園」を捨てることで、やっとそ

こから解放されるはずのラネーフスカヤは再び孤独に翻弄されるのです。結語として、俳優は「桜の園」を去るラネーフスカヤの一見解き放たれたかに見えるその孤独と哀愁を身体で表現します。

【上演データ】
●劇団名：三木美智代 in 風蝕異人街
●タイトル：三木美智代飛び出せ文学全集シリーズ「桜の園」
●上演日程：9 月 1 日（月）20 :00／9 月 2 日（火）14 :00／19 :00
●上演時間：45 分
●演出　こしばきこう　　●出演　三木 美智代
●参加人数：2 人
●メールアドレス：　m_mmiikkii@hotmail.com

劇団紹介⑧

雲の劇団雨蛙

【劇団について】

島根を拠点に活動する、役者 朝日山裕子と作・演出家 岡田和歌冶のユニット。2012 年 9 月に広島で行われた劇王 X 中国ブロック大会より活動開始。その時の演目「positive」を 1000 人に見てもらうべく、全国行脚中。

また、5 年後の劇団を想像し、全国で知り合った演劇人達と様々なプロジェクトを立ち上げ活動している。 6 月末には、劇団主催企画「西向く士、東へ」プロジェクト 寺山修司「盲人書簡」で SENTIVAL！2013 へ参加。これまでに、宮城・東京・群馬・静岡・愛知・京都・大阪・広島・島根で公演。

【作品について】

この「財産没収」という作品はテネシーウィリアムスの一幕劇であり、初めて「カメラアイ」という演出的手法を取り入れて行われた、実験的または前衛的な芝居であった。

登場人物は、二人。片手にバナナ、片手に壊れた人形を持って、レールの上をバランスを取りながら歩く、年には不釣り合いの化粧と夜会服の少女と、凧遊びをする少年。ミシシッピーの廃退した風景の中で交わされる、無知で無垢な幼い会話。バランスを失いレールを踏み外した少女は少年と出会う。財産を失い、家族を失った少女が 1 人。世間に投げ出され、生きるために。亡き姉の人生をなぞるように生きる少女はいつしか、少女として扱われなくなっている。

テネシーウィリアムス的世界観が生み出す、「子供と性」について考えていきたい。

【上演データ】

●劇団名：雲の劇団雨蛙
●作品：『財産没収』（テネシー・ウィリアムズ）
●上演日程：9 月 2 日（月）20 :00／9 月 3 日（火）14 :00／19 :00
●上演時間：30 分程度
●演出　岡田和歌冶／制作　朝日山裕子、田仲ぽっぽ
●キャスト　田仲ぽっぽ／山崎謙吾
●メールアドレス：kumogeki.amagaeru@gmail.com
●参加人数：４人

■取材について

記事掲載や演劇祭についてのお問い合わせは、以下にまでお願いいたします。

TEL：080-4205-1050 （赤井）
E-MAIL：itabashi.buhne@gmail.com

※プレスリリースに掲載している劇団の連絡先は、各々の劇団から許可を取って掲載しておりますので、上演作品の内容については、各々の劇団連絡先にコンタクトを取っていただいても構いません。尚、問い合わせの際には板橋ビューネのプレスリリースを見たという旨、参加劇団にお伝えいただくようお願いいたします。特に演劇祭実行委員側で確認を取ることはありませんが、トラブルは負いかねますのでご了承ください。

■公演データ、公演画像について

プレスリリースに掲載している公演データや劇団に関する情報、公演画像は掲載記事にご使用いただけます。尚、ご使用の際には必ず上記連絡先まで一報いただきますよう、お願いいたします。

著作権及び著作隣接権に関するトラブルを未然に防ぐためにも、どうぞご協力お願いいたします。

■ご観劇案内

①ご予約

「ご観劇日時」「お名前」「ご連絡先」を記載の上、実行委員のメールアドレスにまでメールをご送信ください。

「板橋ビューネ」実行委員会メールアドレス：itabashi.buhne@gmail.com

②予約完了

担当の者から返信が届き次第、ご予約完了です。

※お名刺など、もしお渡しなられる場合には、受付ではなく、上演終了後に実行委員にお渡しいただければ幸いです。その際、スタッフに一言お言付けください。

■舞台芸術関係者割引

当演劇祭を、舞台芸術に従事されている方に広くご覧いただきたいと考えておりますので、関係者様方向けの特別料金を導入いたしました。

舞台芸術（演劇、ダンス、音楽含む）に関係する「制作組織」「財団法人などの組織」「劇場」「学校」に勤務されている方、または舞台芸術に関係する「学校」「養成所」「劇団」「部活動」に通っている方が対象となります。

ご予約方法は上記と同じですが、「勤務先」ないし「通っている学校」をメールにご記載いただければ、特別料金 1,500 円でご観劇いただけます。